

愛宕山百韻を読み解く（三）

伊藤浩睦

花落つる池の流れをせきとめて 紹巴

これは第三としては異例の句であり、連歌の約束に反するものです。素人であればともかく、日本一の連歌師がやることではありません。参加者は驚いたに違いありません。

ときは今天が下しる五月哉 光秀

この句に隠されている暗喩に行祐は気が付かず平凡に約束通りに脇句を付けました。光秀の暗喩に気が付いた紹巴は、「ときは」が「土岐は」であり、「天が下しる」は「天下を知る」であると読み解き、土岐源氏である自分が天下を取るという意図を、光秀が密かに表明したことに気が付いたのです。

そうなると、連歌の約束事がなんてことは言っていられません。「花落つる」で織田信長の首が落ちることを言い、「せきとめて」で止めておけという自身の意見を伝えたのです。そのため連歌としては混乱したものになってしまいます。

初折の表の残り五句を紹介します。

風に霞を吹き送る暮れ 宥源

春も猶鐘のひびきや冴えぬらん 昌叱

かたしく袖は有明の霜 心前

うらがれになりぬる草の枕して 兼如

聞き慣れ似たる野辺の松虫 行澄

この日の席次の順に句が出ていますので、ここまでは膝送りだったようです。初折の裏からは順不同になりますから出勝ちになります。出勝ちになると不慣れな光秀の家臣の東行澄は一句も付けられず、この人の句は松虫の句のみとなっています。

第三で花が出てしまったので、大善院住職の宥源は霞を入れ、里村昌叱は春を

入れて春の句としています。春は三句から五句去りなので、里村心前は春から離れて霜を入れて冬の句にして、猪名代兼如はうらがれを入れて冬の句を続けますが、冬は夏と同じく一句から三句去りなので、東行澄は松虫を入れて秋の句にしています。その結果、初折の表で四季が早くも一巡してしまい、それも逆行で季節が並ぶことになってしまいました。

初折の表は静かな展開が求められていて、恋や花といった派手なものや、述懐や釈教や神祇といった重いものは出さないことになっています。通常の展開で行けば、発句と脇句が当季の夏であれば、第三からは無季に転じて、無季の無難な旅の句を三つくらい続け、そのあと秋の句を三つ入れるというかたちになります。季節も順に行き、初表八句のうち有季が五句、無季が三句という調和のとれた展開になります。初折の八句が全て有季というのは趣向が季節に偏り過ぎます。

二の表以降は連歌の約束通りに句が繋がっていき、恋の句も出て、花は定座かそれに近いところに入って無難な展開になって行きます。

国々は猶長閑なるころ

光慶

百句目の挙句を十四歳の明智十兵衛光慶が詠んで終りになりますが、光慶の句はこれ一句であり、その前が花の定座ですから、約束通りに詠まれたら挙句は春になるので、この句は光慶に花を持たせるために事前に用意されていたものと思われます。

* 「膝送り」は決まった順に句を付けていくことで、「出勝ち」は先にうまく付けた人の句が採用されること。